



くふうする子、なぜ？不思議！と感じる子

季節は梅雨のさ中ですが、晴れた週末、みんなで慌ててじゃがいもを堀りました。先生たちはこのじゃがいもで、子どもたちとどう楽しもうかと思案中です。今年は枇杷もたわわに実り、子どもたちの昼食には3回も登場しました。ヤマモモは収穫を手伝ってくれた子どもたちと生で食べたり、甘く煮てヨーグルトにかけて食べたりしました。ヨーグルトにかけたほうは、「甘くて美味しかった。また、食べたいなあ。」と好評でした。一方で大人たちは、自然を相手にする仕事の忙しさを実感しました。実り具合を毎日確かめ、カラスの襲来を心配し、空模様と相談して、収穫したらすぐに痛まないように保管し、調理する。美味しく無駄なく感謝していただくということは、こんなにも心傾け、手間暇かかることなのだと、改めて農家の皆さんのご苦労を思いました。さて、子どもたちは何を見て、何を感じていたのでしょうか？

愛隣幼稚園の保育目標をテーマにした園だよりの3回目はくふうする子、なぜ？不思議！と感じる子です。実は子どもたちは生まれて間もなくから「なんでだろう？」「わ！おもしろい。」「おやおや、ふしぎふしぎ」なんてことは思っているし、感じているのです。寝返りがうてない頃だって、キラキラ光るのがあれば興味津々です。自由に動けるようになって、ティッシュペーパーが箱から次々取り出せることに気が付けば、「なんでどんどんでてくるんだろう？」と面白がってやってみて、止められなくなります。ほしい物が手の届かない高い所に隠してあれば、ちゃーんと工夫します。踏み台を持ってきたり、筆筒の引き出しを階段状に出して登ったり、敵もさる者、あっぱれと思わされることしばしばです。そう子どもたちはもともとくふうする子、なぜ？不思議！と感じる子なのです。そして、2歳から3歳になる頃には「これなーに？」「あれなーに？」「どうして？」「やってみたい！」「じぶんでやる！」知りたいこと、やりたいことは次から次へと果てしなく、一緒に生活する大人は少々（いや、かなり）面倒くさい時期を迎えることになるわけです。朝から晩まで？と！が怒涛のように押し寄せてくるのです。さて、どうしたものかと思えます。さっさと答えを与えて終わりにするのか、はたまた、聞こえぬふりではとぼりがさめるのを待つのか。本当は、なぜ？や不思議！を共感したいと思えます。すぐに答えがでない寄り道を一緒に楽しめたらいいのと思っています。ところがそれはなかなか難しい、大人もエネルギーが必要です。

さて、ここまで読んでこられた皆さんはお気づきだと思います。そうです、もともとくふうする子、なぜ？不思議！と感じる子だった子どもたちが、次第に「なぜ？」と聞く回数が減っていくのです。もちろん、分かるようになったことも増えているのですが、大人がどう関わったかということにも問題がありそうです。もしも“ほんとだ！ふしぎだね～”と共感してくれる大人がいなかったら、子どもたちの瑞々しい気付きや驚きは、やがてしぼんでいくでしょう。きらきらとした感性も輝きを失うことになるかもしれません。共感する大人の存在が必要なのです。答えをくれる大人ではなく、答えと一緒に探してくれる大人、その面倒な過程を面白がってくれる大人が必要です。もし大人が答えや結果を出すことを急げば、工夫したり試したりする寄り道の楽しさや面白さを子どもは経験することができません。これを楽しみと感じた経験が、「あーでもない、こーでもない。」と失敗や誤りを繰り返しながら、適切な解を求めていこうとする人を育てるのです。私たちの役割はここにあるようです。

幼児期には～くふうする、なぜ？不思議！と感じる力～を育てたいと思えます。子どもたちを科学者にするためではありません。（もちろんその中には興味が深まり、研究者の道を選択する者も現れるでしょう。）子どもたちには周囲で起こる様々な出来事に関心を持ち続ける人になってほしい、そこにある課題を解決しようとすることに、意欲的な人になってほしいと願います。自分たちの生きる社会を、自らの力で切り拓いていくひとり一人になってほしいと願います。子どもたち誰もがもって生まれてきた感性や探求する喜びがしぼんでしまわないように、もっともっと輝きを増すように、私たちは共感し答え探しの過程を喜んで共に歩みたいと思えます。